

団体名	認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ	活動タイトル	子ども食堂の「気になる子」とのエピソードを通じた見守りネットワーク形成支援事業	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■活動風景	
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	当団体のビジョンは「子ども食堂の支援を通じて、誰も取りこぼさない社会をつくる」である。コミュニティの衰退など様々な要因により人々の孤独による不安は高まっている中で、安心してほっとできる、より多くの人々が支え合う、より包摂的な地域・社会づくりが課題となっていると考え、そのような安全地帯（居場所、セーフティネット）の構築が人々のチャレンジを促し、地域と社会の活性化と発展を可能にする。そのような居場所が至るところに存在する日本社会を目指したい。			
●団体の社会的役割(ミッション)	当団体は2つのミッションを掲げている。個々の子ども食堂や地域単位のネットワーク団体に寄付を仲介したり、保険衛生環境の向上を支援することで、子ども食堂の質的向上と量的増加を図ることなど「子ども食堂が全国のどこにでもあり、みんなが安心して行ける場所となるよう環境を整える」。そして、より多くの企業・団体の多様なコミット（運営参入、寄付、協賛等々）を促し、提案・協力・協働することなど「子ども食堂を通じて、多くの人が未来をつくる社会活動に参加できるようにする」。	子どもの見守りネットワーク地域間情報連携のイベント(オンライン)の風景		
●団体の活動基盤	人材育成：当団体は、各プロジェクト単位のできるかぎりの自律的運営と、軽装備の管理機構を組織方針運営方針として持っている。そのため、プロジェクトマネジメントの資質を備えた自律的な「仕事人集団」をめざす。異質なセクターを架橋するためのマルチセクター人材が必要。活動資金：地域と社会の理解を促進するための十分な広報・啓発費、根拠となる調査研究費など、受益者負担でまかなえない領域をカバーする資金の確保を目指す。そのために、多様な財源獲得ツールを駆使できるだけの知識の蓄積も必要と考えている。ナレッジ：子ども食堂の多様な運営状況、課題感、想いを蓄積するコミュニケーションが必要。また、架橋していく先の企業等の社会貢献意識やCSRへの課題感などにも敏感でありたい。			
■活動内容		■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
<p>本事業では、経済的困難を初めとした様々な課題を抱えた「ちょっと気になる」子どもや家族との関わりについて、25の子ども食堂から70の事例をヒアリングし(2020年度事業)、その事例をエピソードとして紹介する冊子・パンフレット等を作成し、子ども食堂が「ちょっと気になる」地域の子どもや家族を見守り支えてきたその役割や意義について広く発信してきた(2021年度)。</p> <p>さらに、ヒアリングした中から、子ども食堂が「ちょっと気になる」子ども・家族を地域の他のソーシャルセクター(学校、行政、福祉専門職、民生委員…他)と連携して効果的な支援に繋げ、また継続的なかかわりを持ちながら必要に応じてサポートできる体制をもっている子ども食堂(運営者)を対象に追加でヒアリングを行い、地域で子どもを見守るネットワークの形成過程について調査を行った。調査に当たっては、地域福祉を専門分野とする金城学院大学の岩穂穂大氏にアドバイザーとして助言を仰いだ。</p>		<p>エピソード大会は当初予定3回の所、2回の実施となった。実施した2地域においては、76%と100%の参加者が「満足」と回答し、また「子ども食堂や居場所の意義を見つめ直すことができた」等、子ども食堂の価値や意義を再確認し、理解を深めることができたと言える。子ども食堂のエピソードのSNS (Instagram) 発信については、2か月に1度36投稿を目標としていたが、思っていたよりも投稿の作成に工数がかかること等から12か月で17投稿(ほぼ2か月に1度、2〜3投稿ずつ)となった。投稿に対しては、リーチ数は800〜1500、いいねは80〜210、フォロワー数は1年で800ほど増え、子ども食堂で起きるエピソードの発信を通して多くの人に子ども食堂の役割や意義を発信できたと考え。</p> <p>子どもを見守るネットワークづくりのための交流会は当初3回を予定していたが、コロナの影響もあり、人を集めてのイベントの開催が難航し、1回に留まった。その代わり、子ども食堂が「ちょっと気になる」子ども・家族を地域の他のソーシャルセクター(学校、行政、福祉専門職、民生委員…他)と連携して効果的な支援に繋げ、また継続的なかかわりを持ちながら必要に応じてサポートできる体制をもっている子ども食堂(運営者)を対象に追加でヒアリングを行い、地域で子どもを見守るネットワークの形成過程について調査を行った。その調査報告も兼ねて、ヒアリング対象となった5団体と共に見守りネットワーク地域間情報連携のオンライン座談会を開催し、それぞれの地域の連携の在り方について意見交換ができた。</p>		
■事業を通じて得られたノウハウ		■望ましい社会状況を達成するための課題		
<p>子ども食堂が「ちょっと気になる」子ども・家族を地域の他のソーシャルセクター(学校、行政、福祉専門職、民生委員…他)と連携して効果的な支援に繋げ、また継続的なかかわりを持ちながら必要に応じてサポートできる体制をもっている子ども食堂(運営者)を対象に追加でヒアリングを行い、地域で子どもを見守るネットワークの形成過程について調査を行った。その調査の結果として、子ども食堂が地域のソーシャルセクターと、子どもを見守る連携を築いていく過程を分析し4つの要素を抽出できた。</p> <p>わたしたちの考える4つの要素とは、子ども食堂運営者等が、①「巻き込まれる力を発揮」する(地域の多彩な場面や関係性に飛び込んだり顔を出したり)ことで、多様な人々と接点を持つたり、場面・関係性ごとに異なった立場や役割を担う(複数の肩書きを持つ)ことができる。その際には、②「心理的安全性を大事にしたコミュニケーション」を行い、一見非協力的なステークホルダーに対しても丁寧に接することで、敵ではなく仲間として捉えることができるようになる。そのことによって、③「地域のWeの拡大」につながり、子どもを見守る地域の仲間が増えていく。その一形態として、④「スノーフレイクリーダーシップ」という、誰か一人に責任が集中するのではなく、誰かが欠けてもステークホルダー同士がつながっている地域という形がある。</p>		<p>子ども食堂は、支援の必要な子や困っている子だけでなく、「誰でもおいで」と広く間口を開放している。そして、その中に貧困や虐待…何か(子ども食堂運営者)「気になる」片鱗を見ることがある。子ども食堂が支援機関ではないからこそ、困っているけれどそれを胸に秘めて、みんなと同じ顔をして安心して過ごせる場所になっている。一方で、子ども食堂は支援機関ではないが、日ごろから関係を積み重ねている子どものSOSを受け取る場面は少なくない。そんな時、子ども食堂だけで抱え込むのではなく、地域の他のソーシャルセクターと連携し、その子やその課題に合った支援の方法を一緒に考え、支えるネットワークができていれば、効果的なサポートをすることができる。そんなネットワークが、小学校区単位の小さな地域社会で全国に構築されることで、誰も取りこぼさない社会が実現すると考える。</p> <p>子ども食堂自体がまだ新しい事象であるためか、このようなネットワークはまだ少ない。地域性や、地域のプレイヤーに無理のない形で、このようなネットワークを全国に広げていきたいと考えている。</p>		
■活動成果のアピールポイント(自由記入)		■活動成果の具体的な変化(自由記入)		
		この1年間の活動を通して	子ども食堂が地域のソーシャルセクターと、子どもを見守る連携を築いていく過程における要素の分析、2箇所の地域の実装	を達成しました。
		直接的には子ども食堂運営者が、地域のソーシャルセクターとつながるヒントを得た。間接的には、子どもたちが、いざという時に子ども食堂でSOSを発信した時に、つながりのある支援を受けられる地域の地盤づくりの契機となった。		